

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：12101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05781・19K20973

研究課題名（和文）美術作品の内容と表現に関する思考の発達を基礎とした鑑賞教育方法と教材の開発研究

研究課題名（英文）Research and development of appreciation education methods and teaching materials based on the development of thinking about the content and expression of works of art

研究代表者

小口 あや (Koguchi, Aya)

茨城大学・教育学部・助教

研究者番号：00825698

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,470,000円

研究成果の概要（和文）：絵画作品（複製）の鑑賞調査から、鑑賞の思考は小学校4年生と中学校2年生の時点で大きく変化することが明らかになった。低学年であるほど、作品内容を中心に感情移入的に鑑賞する傾向があった。高学年になると、作品表現を批評的に鑑賞する傾向が強まった。大学生になると必要に応じて過去の思考方法を用いて鑑賞する傾向が見られた。また、工芸作品（実物）の鑑賞調査では、どの学年においても絵画作品（複製）とは異なる思考の跡が見られた。そこで、工芸作品ならではの鑑賞指導方法を考案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では調査で明らかにした様々な年代の鑑賞者の思考を基に、美術作品の鑑賞の指導方法とワークシートを開発した。指導方法とワークシートは、教育現場で使いやすいように冊子にまとめた。また、鑑賞対象には工芸作品も含み、各年齢の鑑賞の仕方を調査した。すると、どの年齢においても工芸作品（実物）は絵画作品（複製）とは鑑賞の仕方が異なることも明らかになった。これを基に、工芸作品ならではの指導方法を考案した。

研究成果の概要（英文）：From the appreciation survey of painting works (reproduction), it became clear that appreciation of appreciation changed significantly between the fourth grade of elementary school and the second grade of junior high school. The smaller the grade, the more the audience tended to appreciate the content of the work. As the grade increased, the tendency to appreciate the expression of the work became stronger. There was a tendency for university students to appreciate using past thinking methods as needed. In addition, in the appreciation survey of craft works (actual objects), there were traces of thoughts that were different from painting works (reproduction) in any grade. Therefore, I devised an appreciation guidance method unique to craft works.

研究分野：美術教育

キーワード：美術教育 鑑賞教育 美術作品 鑑賞作品 指導方法 ワークシート

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

鑑賞の発達段階についての研究は、様々ある。しかしそれらは、学校教育現場で指導しやすい指導方法と教材としては存在していない。この状況から、各発達段階にある鑑賞者の思考を基にした一貫性のある指導方法と教材の開発が必要であると考えた。また、絵画作品のような見ることを目的に作られた美術作品だけでなく、工芸作品のように使うことも目的の一つとしている作品についての鑑賞指導方法論については、さらに研究が少ない。鑑賞の対象となっているのは、各年齢の鑑賞者は、工芸作品の何をどのように鑑賞するのかについても明らかにされていない。

本研究代表者は既に行っていた調査で、小学校3年生の児童が複製絵画の鑑賞時に作品の内容と表現について思考することを明らかにしていた。さらにその調査では、児童は感情移入的な思考と批評的な思考を持って鑑賞していることを明らかにした。ただ、作品の内容と表現に関するこの思考が他の年齢の鑑賞者ではどのようになっているのか、それらをつなぎ合わせるとどのように変化するかについては未知の状態であった。

### 2. 研究の目的

工芸作品を含む美術作品の内容と表現についての思考が年齢によってどのように変化するかを調査と分析から明らかにする。そしてそれを基にした鑑賞者の思考の発達に応じた一貫性のある指導方法とワークシートの開発を行うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では様々な年代の鑑賞者に行った同一の調査から鑑賞の指導方法と教材を開発した。調査と分析は以下の通り行った。

#### (1)調査方法

##### 絵画作品(複製)

鳥獣人物戯画の一場面の複製をA4サイズ用の紙に余白をとって印刷したものと吹き出し型のシールを、鑑賞者一人につき一組ずつ用意した。鑑賞者には、作品を見て思ったことをシールに記述し任意の場所に貼るよう指示した(図1)。調査は、協力が得られた小学校1・3・4年生、中学校全学年、大学生(美術選修・非美術選修)の児童生徒と学生を対象に行った。



図1 複製絵画の鑑賞調査見本

##### 工芸作品(実物)

鳥獣人物戯画のとは異なる一場面が扇部に印刷された京団扇一枚と吹き出し型のシールを渡した。京団扇を使って思ったことをシールに書きながら鑑賞活動を行った。その後、同一の京団扇の写真が印刷されたA4サイズの用紙を渡し、記述したシールを任意の場所に貼るよう指示した。調査は協力が得られた小学校5年生、中学校全学年、大学生(非美術選修)の児童生徒と学生を対象に行った。

#### (2)分析方法

得られた記述場所と記述内容をそれぞれ以下のように分析した。

##### 絵画作品(複製)

記述された吹き出し型シールが、作品の内側・外側(余白部分)・その中間のどこに貼られたかを調べた。そしてそれぞれの場所に貼った人数を学年ごとに調べ、百分率に表して学年の傾向を分析した。

記述内容は、大きく以下の八種類に分けられた。「㊦登場人物のセリフ・作品内で聞こえると想像される音(例:俺の方が強い!)」「㊧作品の情景描写(例:植物が生えている)」「㊨(㊦㊧を基にした)作品の情景解釈(例:踊っているように見える)」「㊩作品の表現に関する直観(例:上の方に曲線が描かれている)」「㊪表現に関する解釈(例:色の濃さで影がついていて立体感がある)」「㊫作品に関する知識(例:鳥獣人物戯画のワンシーン)」「㊬作品評価(例:全体的に少し奇妙)」である。㊦㊧㊨は作品内容、㊩㊪は作品表現、㊫は作品の知識、㊬は作品評価に関する思考の表れだととらえる。学年ごとにこの㊦~㊬を記述した人数を調べ、百分率に表し学年ごとの傾向を分析した。

##### 工芸作品(実物)

記述場所に関してはと同様に、記述された吹き出し型シールが作品の内側・外側(余白部分)・その中間のどこに貼られたかを調べた。そしてそれぞれの場所に貼った人数を学年ごとに調べ、百分率に表して学年の傾向を分析した。

記述内容については、㊦㊧㊨のような記述はどの学年においてもあまり見られなかった。絵画(複製)鑑賞とは異なる工芸作品ならではの鑑賞時の思考があると考えられた。そこで、団扇に関する記述内容が視覚以外にもある他の感覚を用いて得られたものを学年ごとに分析することにした。

### 4. 研究成果

#### (1)絵画作品(複製)

##### 記述場所の分析

小学校1年生から中学3年生までの調査結果を並べて分析すると、小学1年生は内寄りに記

述場所を選ぶ傾向が大きい、学年が上がるにしたがって徐々に外側に記述場所を選ぶようになる。さらに、大きく変化するのは小学校4年生と中学校2年生であった。

この分析結果から、さらに学年が進んで大学生になると外のみ記述場所を選ぶ学生が多くを占めると予想していた。しかし、大学生の調査結果では、非美術撰修の学生に関しては、外のみ記した学生は大変少なく数パーセントしかおらず、外と間を選んだ者もいなかった。そして、記述場所に内寄りを選ぶ傾向が復活していた。記述場所に外寄りを選ばないというこの傾向は、美術撰修の学生を対象にした調査結果にも見られた。学年が進むと記述場所に外寄りを選ぶ傾向になるだろうという予想は大きく外れた。

#### 記述内容の分析

小学校1年生の記述内容は、「㊦登場人物のセリフ・作品内で聞こえると想像される音（例：俺の方が強い！）」について記した児童は全体の100%に近い割合でいた。続いて「㊧作品の情景描写（例：植物が生えている）」「㊨（㊦㊧を基にした）作品の情景解釈（例：踊っているように見える）」も見られたが、それ以外の記述内容はなかった。㊦㊧㊨は作品内容に関する思考の表れなので、小学校1年生の思考の明確な特徴が分かる。さらに小学校1年生が記した調査用紙には、鑑賞者の分身のような人物が描き加えられていた。描き加えられた人物たちは、作品について何か話していたり作品の登場人物として話していたりしており、それは作品に対する感情移入の度合いの強さを示すものと判断した。また、小学3年生も㊦は大多数の児童の記述があった。ただ3年生は、1年生と異なりその他㊨㊩以外の記述内容も多く見られた。作品内容と表現についての思考がされ、一部の児童は作品の知識についても語るようになった。小学校4年生は㊦が大きく減るといふ変化が見られた。その代わり㊦以外のすべての記述が出始めた。中学校1年生も㊦の記述は1・3年生ほどなく、㊦以外の記述があった。内容についての思考がやや弱まり、その分表現や知識、評価についての思考が出てきたと解釈できる。さらに中学校2・3年生でも大きな変化が見られ、㊦を記した生徒は激減した。その代わり他の記述をする生徒の割合が、中学1年生よりも大きくなった。年齢と共に、作品の内部に入って作品内容を感受するような㊦の記述は減る傾向にある。一方、作品表現や知識、評価についての記述は増えた。

記述場所の傾向の変化と同じように、記述内容についても大きく変化する年齢として小学校4年生と中学校2年生が挙げられると判断できた。この時期の変化は、他の領域においても言及されている。

また、ここまでの結果から、大学生は㊦の記述はほぼなくなるものだと予想していた。しかし、実際の調査結果からは非美術撰修の学生で50%、美術撰修の大学2年生と3年生ではそれぞれ20%強と80%で、予想が外れた。また、大学生は㊦以外の記述も多かった。大人になると、必要に応じて過去の思考方法を用いて鑑賞することができる表れだと解釈した。

#### 鑑賞指導方法とワークシート

分析したことを基に、学校教育現場で指導しやすい指導方法とワークシートの開発を行った。これらは、小学校1年生以降、小学校3年生以降、小学校6年生以降、中学校2年生以降に分けて作成した。また、これらは絵画作品だけでなく見ることを目的とした作品全般に用いることができる。

小学校1年生は、作品内への記述と㊦の記述内容の多かったことから作品内の声や音を想像することで、主に作品内容をつかむものにした。小学校3年生以降は作品内容と表現の両方を意識して感受させるようにした。以前の研究から、内容については主に作品内の記述に、表現については主に作品外の記述に現れることが明らかになっていたので、ワークシートもそのような構成にした。小学校6年生以降は、基本的には小学校3年生と同じような指導方法ではあるが、作品評価をしたがる児童が増えてくることで鑑賞の授業を通して明らかになった。そのため、作品評価についても問うことにした。中学校2年生以降は、作品内に埋没して登場人物のセリフを考えるよりも、作品を少し離れたところから客観的にとらえることを充実させた。これら各学年を対象にした指導方法とワークシートを『明日、鑑賞の授業をするあなたに』という学校教育現場で使うことを想定した冊子にまとめた（図2）。



図2 作成した冊子

#### (2) 工芸作品(実物)

##### 記述場所の分析

工芸作品の調査においては、どの学年も作品の外への記述が目立った。これは、絵画作品の複製を鑑賞した時とは大きく異なる点である。このことから、使うことも目的の一つである工芸作品は、見るのが目的である絵画作品とは見方が異なるということが明らかになった。

##### 記述内容の分析

記述内容を分析すると、視覚で感じたことだけでなく、聴覚、触覚、嗅覚等その他の感覚で感受したであろう記述がどの学年にも見られた。また、調査は対面で行ったのだが、その時の鑑賞者の様子として低学年ほど視覚以外の感覚を用いて鑑賞している姿が目立った。絵画の複製作

品の鑑賞調査では、視覚以外の感覚を用いた記述はなかったので、実物の工芸作品を用いた鑑賞ならではの思考であると考えられる。

#### 工芸作品鑑賞の克服課題

調査の後に、様々な色や形や素材でできている団扇を鑑賞する活動を行った。

団扇はその素材や作り等によって、受ける印象が異なり、扱い方も異なる。例えば厚めの和紙でできている団扇は強く扇いでも壊れる心配はあまりないし、むしろそのように扇いだ方が団扇の雰囲気合う。だが繊細な作りの団扇は、優しくゆっくり扇ぐ方が合うように感じられる。だが、どの学年の鑑賞者も、どの団扇も同じように強く扇ぐ姿が見られた。素材や作りを意識して扱うことが大学生であってもできていなかった。プラスチック製の団扇のように、頑丈で安価な使い捨ての製品に囲まれている現代に生きる我々ならではの課題なのかもしれない。よって、これを克服課題とした団扇の鑑賞授業を中学校1年生の生徒を対象に授業を実践した。

#### 工芸作品の鑑賞実践

作品の素材や作り等を様々な感覚で感じ取り、その作品にふさわしい扱い方を考え実行することを目標とした授業である。

授業では様々な種類の団扇を鑑賞する前に、10 cm四方程度の大きさに切った厚い工作用紙と薄いビニールを、鑑賞者が手の平に載せて動かす活動を取り入れた。工作用紙は厚みと重さがあるので手を急いで動かしても落ちることはない。一方、ビニールは薄く軽いので、それを載せた手はゆっくりと動かさねば落ちてしまう。この体験から素材によって扱いは異なり、それは様々な素材を加工してつくられた団扇も同様であることを伝えた。

この活動の後に、任意の団扇の鑑賞活動を行った。鑑賞は 作り 色や形 素材 使い心地を様々な感覚を用いて感じ取り、最終的に鑑賞対象に選んだ団扇はどのように使うことがふさわしいのか(どのように動かすか、どのようなシチュエーションで用いるか)を考えるという流れで行った。様々な感覚を使って鑑賞するというのは実物の工芸作品を用いるからこそできる鑑賞方法であるし、調査から学年が上がるにつれて視覚以外の感覚を使うことが鈍くなるようであったため、それを鍛えるというねらいもあった。

授業中の生徒の様子や授業で用いたワークシートを見る限りでは、生徒一人一人がこの授業の目的を理解し選んだ団扇にふさわしい使い方を考え、使うことができていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小口 あや	4. 巻 40
2. 論文標題 美術鑑賞における中学 2 年生からの自己の転換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学：美術科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 171 ~ 184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.24455/aaej.40.0_171">https://doi.org/10.24455/aaej.40.0_171</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小口 あや	4. 巻 41
2. 論文標題 美術鑑賞における小学校1年生と大学生の思考の軌跡 観念的思考と現実的思考の表れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術教育学：美術科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 141 ~ 153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小口 あや	4. 発行年 2020年
2. 出版社 自費出版	5. 総ページ数 21
3. 書名 明日、鑑賞の授業をするあなたのために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小口あや、工芸鑑賞指導の視点の提案、「美術科教育学会、千葉大会研究発表予稿集、2020、p.76  
(美術科教育学会千葉大会で発表予定だったが、コロナ禍により学会中止、予稿集は発行)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----